
私たちの戦争

薙月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちの戦争

【Nコード】

N3031F

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

少し先の未来。技術の進歩によって人類は現実と区別が付かない世界を作り出した。平和な世の人々がそこに何を見て何を感じるのだろうか。

第一話 答えを探して

第一話 答えを探して

千種琴美は留置場を出ると、何かから開放されたような気分になった。やはり、警察署は空気が重い。彼女はこれが刑務所になったら、自分の体は空気だけで押しつぶされてしまうんじゃないだろうかと思った。

見上げた空は暗く空気は冷たい。もう秋なのだ。警察署の前を歩く人の何人かが琴美を見る。彼女はその視線を感じると警察署に来ることはあまりいいことじゃないと思った。彼女は、これ以上見られるのも良くないので、その場を離れて自宅への道を歩いた。

何故琴美が留置場から出てきたかという、友達が事件を起こしてしまったからだ。彼女は先ほど彼のお母さんから頼まれた物が入った包みを渡してきた。彼女は彼とは仲の良い友達であり、そのため彼のお母さんから頼まれたのだった。彼女はまさか本人が望んだのだろうかと少し考えたが、そんな事は無いという結論に至った。

琴美には、彼とはほんの少しの間会わなかっただけなのに以前とは別人のように見えた。それは面会のとき、一瞬誰なのか尋ねてしまいそうになったほどである。

彼は素直に自分がやった事を認めている。彼は今回琴美の友達を殺そうとしたのだ。幸い相手の友達に別状は無い。彼女は何故そんなことをしたのか彼に聞いてみたものの、口を開いてくれなかった。認めたものの理由は話してくれないという状態である。事件に関わった人間に聞いてみても、口を開いてくれなかった。彼が喋らないかららしい。

琴美は交差点で赤信号に立ち止まる。彼が今回の事件を起こすに至った理由はなんだろうか。彼女は行きかう車や人を見ながら思った。

信号が青になると同時に、琴美は歩き出した。道路を渡る人を見ればサラリーマンらしき人がタバコを片手に持つて歩いてくる。

琴美はため息をついた。彼女はタバコの煙が大嫌いである。故に彼女にとってタバコなどというものは危険物指定ものであり、叶うなら地球上から消し去りたいぐらいのものである。

琴美は通り過ぎる男の後に残った微かなタバコの匂いに吐きそうになりつつ急いで家に帰った。

「ただいま。」

「おかえり。琴美。」

琴美が玄関のドアを閉めれば、母親の声が台所から聞こえてくる。

琴美は夕食とお風呂を済ませると、自分の部屋に戻り、ベッドにダイブした。そのままベッドに仰向けになり、先ほどからずっと気になっていた事を考えた。それは、彼が事件を起こした理由である。本人が言わないのだから、自分で考えてみるしかないと思っただけだ。

そこで、琴美はふとある出来事を思い出す。その事は彼女が考える事について内容的にも関係がありそうなものだった。彼女はそれが起こった時期も、その後の言葉も今回の事件に関係がありそうな気がした。

琴美は、ベッドから勢いよく起き上がると、机に座った。明かりを点けて、机の上に置いてあるノートパソコンを起動した。

琴美は、文章を書くためにメモ帳を開く。そこで、彼女は一度手を止めて考えてみた。これを書いた事で何か変わるのだろうか。彼女自身現時点ではそれはわからない。しかし、書く事で思い出す内容を残しておける。一瞬現れて消えていく記憶も残せるはずだと思っただけ。それに、書いていくうちに理由がわかるかもしれないと思っただけ。

琴美は背筋を伸ばすと、キーボードを叩き始めた。

第二話 私たちと遊び

第二話 私たちと遊び

「私は今回の事件に至った理由を知るためにこの文章を書く。だから、この文章を誰かが読むことも無いと思う。私がわたしに教える文章だから。」

今回の事件は、私の考えでは夏のあの出来事が関係すると思っている。それは、学校の友達が集まってゲームをしたとき。

あれは夏の暑い日。学校が夏休みに入り、一時的にも勉強するという行為から開放された時だった。

私は親しい男女の友達が同じクラスに六人いる。

何時も一緒に遊んでいる榎木すずか（かしぎすずか）。何時も静かで、口数が少ない。容姿と育ちのよさからか、男子からの人気は高いらしい。しかし、本人はそのことに全く気が付いていない。

クラスでは女子の先頭に立って男子を圧倒する栗原恵美。くりはらえみ陸上部に所属し、元気が有り余っている。この元気を少しでもすずかに分けられたらいいのにと何時も思う。あまみやたく

良く恵美と喧嘩をする雨宮拓。前に恵美と付き合っていたらしいけど別れて仲が悪くなったままだしい。事あることにぶつかる二人は「喧嘩するほど仲が良い」は通用しないように思える。

クラスの委員長をしている桐生誠。きりゅうまこと眼鏡をかけていて、私たちの中では一番頭が良いと思われる。冷めた口調で言葉を発するため圭をよく怒らせる。

クラスに一人は居るだろうガキ大将ポジションの友永圭。ともながけい背が高く初めは近寄りがたい存在だったけど、女には手を出さないという信念を持っているとのことらしい。良く恵美と口論をすることがあるが、終わるとお互い笑いあっている。誠とはあまり仲が良いとは言えない。

クラスでも身長が低めの花谷翔^{はなやしゅう}。良く圭に弄られている。弄る圭を良くは思っていない。そして、誠に良くは思われていない。理由は知らないが、誠の行動からそう見えた。

このようにみんな仲が良い訳じゃない。だけど、その中に私とずかが入れば表面的には落ち着いた状態になる。

私は夏期講習が終了したために、何かをしたいと思った。他のみんなも同じような気持ちだったと思う。だから、拓が言った言葉を聞き入れたんだろう。

その時、拓は私たちに「面白いゲームがあるんだけど、明日にでもみんなでやらない」と言った。拓の話では、アテナスパッド対応の新しいゲームを買ったらしかった。

これは医療用のアテナシステムをパソコンゲーム用のコントローラーに応用したものだ。

人間機械間相互感覚伝達装置（通称：アテナシステム）

このシステムは、2040年に日本で医療用として義足や義手を使用する人々のために開発されたものである。体と機械である義手や義足の間に挟みこむことによって、義手や義足に伝わる物の重さや形を理解できるようになる。初期の装置では触覚のみを対象としていたが、研究が進み触覚以外の感覚にも対応した装置が開発された。人々はこの装置を人類の知恵の結晶であり、使用した本人に自治と平和をもたらすとしてアティーナのシステム（アテナシステム）と名付けた。しかし、五感全てを伝達出来る装置となつたために悪用が懸念され、現在では各用途ごとに機能を制限したものが使用されている。また、この技術はゲーム業界にも応用されアテナスパッドという名称でゲーム用コントローラーが発売されている。

（アテナシステムとはより抜粋）

拓が提案したためか、難なく事が進んだ。恵美は私とずかが行くということで行く事を決めたようだった。私たちが行かなかつ

たら、やはり恵美も行かなかっただろう。

私はパソコンは持っていないゲームはしないのでアテナスパッドという名前ぐらいしか知らない。けど、拓の他にも男子はみんな持っていたし、恵美も持っていた。それぞれ、何かゲームをやっているんだろ。タイトルを聞いても分からないのでその辺はやめていた。

次の日、拓の家にみんな集まった。両親は出かけていて、私たちだけだったと思う。

拓は自分の部屋に私たち全員を通す。机の上にはマイク付ヘッドマウントディスプレイと医療用で使われそうなコードの付いたパッドが二枚あった。拓から話を聞けば、それがアテナスパッドらしい。パッド自体はおまんじゅうぐらいの大きさのパッドだ。その中にどれほどの技術が詰まっているのだろうか。私は、そう思ったことを覚えている。

七人も居るので、ゲームはそれぞれ順番に行った。ゲームをしていないほかの人はパソコン本体のディスプレイに出力された映像を見たり漫画を読んだりおしゃべりをしている。「これが面白いゲームなのか。これなら俺もやった事あるぞ。」と一番手となった圭が言いながらアテナスパッドを両腕に貼り付け、マイク付ヘッドマウントディスプレイを頭に装着した。拓は笑いながら「違うよ。これは操作に慣れてもらう事も兼ねてるんだ。初めての人だって居るんだからね。」と拓は言うのと私とすずかを見た。

ゲームは三次元空間の中でキャラクターを操作して現れた敵を倒していくアクションゲームらしかった。

圭はゲームが終わるまで、一度も体を動かさなかった。手を机の上に置いたままなのに、画面のキャラクターは色々な方向に移動する。拓の話では、アテナスパッド使っていると、自分の思った通りにキャラクターを操作出来るとのことらしい。

横に居るすずかを見れば、じっとディスプレイを見つめていた。すずかは私の視線に気が付くと「琴美ちゃん。私たちにも出来そう

ですよ。」と私を見て言った。実際簡単そうだということは圭の操作を見ていればわかったし、複雑に考えなくても出来た。全てが思ったとおりに動いてくれるからだ。それにヘッドマウントディスプレイの画面が大きいので、まるでゲームの中に居るような感覚になった。

私が遊んだあと、すずかもそのゲームで遊んだ。すずかは、「こんな楽しいものもあるんですね。知りませんでした。」と言っていたと思う。

みんなが順番に遊んでいくも、誠だけは遊ばずに漫画を読んでいた。やらないのと聞けば、「そのゲームはいい。新しく買ったゲームを始めたら呼んでくれ。」と小さく言ってまた漫画を読み始めた。その時は、翔が遊んでいたと思う。

拓と誠を覗いたみんなが一通り遊んだ。拓はパソコンを操作しながら、「さてと、そろそろこっちで遊ぼうか。」と言った。ディスプレイが真つ暗になって「The War's force」と中央に表示された。これが、拓が買ったゲームだった。

第三話 断片の寄せ集め

第三話 断片の寄せ集め

「それは名前の通り戦争ゲームであり、人と人が殺し合いをするものだった。それも、簡単な内容では無かった。拓の話では、自分が画面の中の戦場にいるような感覚になるという。それは、アテナスパッドによって視覚以外の全ての感覚が直接自分の体に流れ込む形になっているためらしい。

拓がみんなやろうと言ったものの私とすずかは避けた。すずかが私の後ろに隠れて私の服を掴んでいるからだ。すずかは、「前言撤回します。」と私の後ろで小さく言った。彼女がそうするとき、とにかくしたくない事が目の前にあるときだった。何時もは、「これはやらなきゃ駄目よ。」と言っていた。しかし、今回はそんな言葉をかけることは出来なかった。私も遊びたいとは思わなかったからだ。私たちの反応に一応納得したほかの友達は順番を決めて遊びだした。順番の決め方は忘れたけど順番は拓、翔、圭、誠、恵美となったと思う。

それぞれが遊び始めたけど、何か変だった。これが、遊びというものなんだろうか、楽しいのだろうか。そんな気持ちが生まれてきた。それは、人が変わったように遊ぶ拓を見たからだ。

ディスプレイ側に出力された映像しか私たちには見えない。映し出される映像は綺麗でまるで現実であるかのように見えた。これに音声、何かの感触や匂いが混ざり合って実際に遊んでいる人間には感じられている。マイクに向かって叫んだりうめき声を上げたりそこには近寄りがたい空気が出来上がっていた。

視点が首の無い兵士に向けられたときは叫びそうになった。本当に首が無いのだ。切れた部分からは血が流れ地面を赤く染めていた。テレビで見る映像ならモザイクがかけられる部分だと思うが、

そんなものは無かった。今思い出しても叫びそうになる。衝撃映像とはこういうものかもしれない。すずかを見れば顔を背けて私にくっ付いていた。私はすぐに拓に聞いた。このゲームは何なのって。

拓は、そのゲームの箱を私に渡した。表はタイトルとゲームのイメージを表したイラスト。裏を見れば動作環境と対象年齢。しかし、そこに書いてあった対象年齢は二十歳以上だった。拓にそのことについて問い詰めようとも、「売ってくれるほうが悪い。」と言うだけだった。実際にお店に行って買ったものでは無いらしい。

私とすずかはパソコンから離れた場所で、コンピュータと殺し合いをしている圭を眺めていた。圭は上機嫌に笑いながら遊んでいる。よくも、そんな状態であんなものを遊べるものだと思った。翔のように何時かうめき声とともにゲームが終わると思ったが、中々終わらない。その時、「コンピュータ相手じゃ限界がある。ネットワーク対戦できるんだろ。」と誠がゲームのパッケージを見ながら言った。圭よりも順番があとの誠は暇でゲームのパッケージを眺めていたらしい。拓はその要望を聞き入れ、ネットワーク対戦をするために専用サーバに接続した。

ゲームとはいえ、これで生身の人間対人間の争いが始まったことになった。パソコン前はコンピュータ相手のときよりも白熱していた。私とすずかと圭を除いたみんながディスプレイを見ながら何やら叫んでいたことを覚えている。何を言っていたかは本当に覚えていない。そんなに重要じゃなかったと思う。

最終的に圭はそれほど苦しまずにゲームを終えた。他の人間よりも元気な姿でパソコンの前から離れた。そして、次の誠と交代する。

私とすずかを除く四人は圭が交代したもののパソコンの傍からは離れなかった。みんな夢中になっている。その時すずかは、「みんなああいうものが好きなんです。なんか、恐いです。」と私に言った。すずかの気持ちは十分わかった。何故みんなあんなにも夢中になれるんだろうか。謎である。

しかし、そんな言葉を体験せずに色々言うのはどうかとその時思った。だから、私もすることにした。私はすずかを見て、「恵美ちゃんの後に私もやってみようと思う。」と言った。すずかの反応は予想通りだったけど。思った事を言ったら納得してくれた。

私は誠が遊び終わったときに拓に言った。男達に、「だったら最初からやるって言えばよ。」と言われたけど気にしなかった。恵美が遊びだすと、パソコンの前に行ってディスプレイを覗いた。

恵美は陸上部に入っているためなのか、人間的な動きが良かった。素早く動きながら撃ってくる敵の頭に銃を向け、引き金を引く。言ってもまだ立ち上がるうとする敵の頭に銃を向け、引き金を引く。言葉では言えない光景が目の前に映し出された。その都度私は叫びそうになるのを押さえた。目の前で人が撃たれる瞬間を見るのは良いものじゃない。しかし、殺さなければ殺される。殺されれば苦しい思いをする。だから、負けるよりは勝つほうが良い。私はじつとディスプレイを見ていた。

第四話 混ざり合ったあの時

第四話 混ざり合ったあの時

「そして、私の番がやってきた。私がこのゲームを遊んだときの事は今でも良く覚えている。内容があまりに強烈だったからだ。

圭の「俺達を見てたらやってみたくなっただろ。」という言葉を通して、私はヘッドマウントディスプレイを装着した。ヘッドマウントディスプレイ側にもディスプレイ側と同じ画面が映し出されていた。

拓の指示でゲームを始める。役割は衛生兵というものがあったのでそれにした。衛生兵というのだから前線には出なくて良いだろうと思った。そういえば恵美は突撃兵だったと思う。私にはそんなことは出来ない。役割を選んだ後、出撃場所を選ぶ。ゲームの読み込み画面が終わると、背中に何か嫌な感じがした。本当に自分がゲームの中に居るような感覚になったからだ。私が入り込んだステージは、緑の見えない土地だった。舞い上がる砂埃、太陽の光。私の体は存在しない砂埃を吐き出そうとせきをする。何もかもが実際にその場に居るかのように感じられた。しかし、それほど驚いてその場には居られない。何処からか聞こえた「おい、ぼさつと突っ立つてんなよ。」と言う言葉に私は体を動かした。近くに居た仲間が言ったらしかった。走っても何故なのか体が重かった。その時は特に考えなかったけど、実際の重量を感じられるようになっていくのかもしれない。すぐに、遠くで爆発音が始めた。私は恐かった。すぐ近くで殺し合いをしているのだ。私は衛生兵なので前線には行かないで済む。そう思って、私は仲間の兵士たちの後ろについて行った。ふと、ゲーム外から、「衛生兵って裏方だから面白いな。」と聞こえた。男達が言ったことは分かったけど、誰が言ったかは分からなかった。争っている区域に近づくにつれて息が荒くなり心

臓の音が大きくなっている事に気がついた。それとともに気持ち悪い匂いがし始めた。火薬の匂いと何か。そこへ負傷した兵士がこちらに来了。そして、その場に倒れこむ。「たっ、助けてくれ。」と言う彼は何箇所かを銃で撃たれたようで服を血で真っ赤に染めていた。鼻につく血の匂い。血の匂いを嗅いだのは血が出るほどの怪我をしたとき以来。だけど、その時は血の量が全く違う。気持ち悪くなるほどの量だった。兵士の「頼む。早く助けてくれ。」という言葉に何度か頷き。装備品のひとつである救急セットを取り出すもその場で固まる。使い方が分からなかったからだ。負傷した兵士は「早くしてくれ頼む。」と苦しそうに言っている。私は、「やり方がわかんないのよ。」と負傷する兵士に叫んだ。「その救急セットを持ったまま負傷した奴に触れれば良いんだよ。」という言葉は何処からか聞くと、すぐに救急セットを彼の体に押さえつけた。すると兵士の体が光り始めた。音が聞こえると共に光りは消えた。そのときには負傷した兵士の体からは血が消え復活していた。負傷していた兵士は「ありがとよ。」という言葉を言うともた爆発音のする前線へと走っていった。こういうところは現実的よりもゲームのし易さを取っているらしかった。銃の弾や救急セットはやはり有限らしく。使用したためか容量が減っていた。補給するためには各所にある補給地点で補給することは恵美が遊んでいたときに分かっていた。

私はそれからもつと前に進んで、小さな町の中に着いたと思う。町の中を奥に見える出口へ向かって進んでいくと、何人もの味方兵士がこちらに向かって走ってきた。口々に「戦車だ。」という声が聞こえた。彼らの後ろから戦車が現れたので、私はびっくりしてその場に倒れこんだ。腰が抜けたらしかった。砲台が回り、停止すると弾が発射された。その音は銃の音なんて目じゃない音だった。その弾はこちらに逃げてくる兵士の一人に当たり、兵士は吹っ飛んだ。弾が当たった兵士は口では言い表せないほどの状態になった。私はその姿を見て叫んでいたと思う。今思い出しても気持ち悪い。ぴくりとも動かない姿は直前まで生きていた人間とは思えなかった。戦

車を見ると砲台が回り、今度はこっちに撃とうとしていた。私は立ち上がれなかったので、必死に戦車の死角へ向かって体を転がした。直後、私が元居た場所に戦車の弾が当たる。弾が当たったときの衝撃で地面はえぐられていた。当たったら痛い、死ぬ。なんとか立ち上がると近くの建物の壁に隠れた。すぐに戦車のほうを見るとまたこちらに撃ってきた。体をくつつけていた建物は衝撃で激しく揺れる。すぐに戦車のほうを見ると相手方の兵士が侵攻していた。その視界に大きな弾が戦車に向かっていくのが見えた。後ろを見ると対戦車のロケットランチャーを持った数人の兵士が居た。しかし、すぐに一人が撃たれて倒れた。私は建物の反対側に走り兵士が居るか確認した。その間にもロケットランチャーが何発か発射される音が聞こえた。案の定敵兵士たちが向かってくる。何もしなければ撃たれて苦しむだけなので戦うしかないと思った。手にもった小型の銃を兵士に向けて撃った。引き金を引くと後ろに引つ張られた。銃を撃つときの反動がリアルに再現されていたようだけど、その時は感心する暇なんて微塵も無い。なんとか弾が当たり倒れこむ敵の兵士。しかし、その後からどんどん兵士が来た。後ろから、「どけ、衛生兵。」という言葉と共にすぐ横を弾が飛んでいく。私は体を引つ込めて後ろを見た。仲間の突撃兵が撃ちながら敵に突進していた。それを確認した後、反対の戦車のあるほうを見ると、相手の戦車は消えていて仲間の戦車が敵を攻撃していた。そこで反撃を始めたと思った私は気が抜けたのか背後の気配に気が付かなかった。背後から聞こえた冷たい金属音に素早く振り返ろうとしたものの、その前に撃たれてしまった。人生で一度も銃で撃たれた事が無かったので、一瞬自分がどうなったのか分からなかった。その姿は、敵から見れば間抜けな姿だったと思う。すぐに体中の無数の場所が熱くて痛くなる。私はうめきながらも撃った相手を見るために振り返ろうとする。しかし、その前にその場に崩れ落ちた。荒く息をする私を見下ろす敵の兵士。その顔はどうしようもないほど危ない顔だった。その兵士からとどめの一発を受けると激痛と共に視界が真っ暗

になった。死んでしまったという事だった。すぐに体の痛みが引く。再び戦場に落とされたけど、少しずつ押されて最終的には基地まで攻め込まれて負けてしまった。今思えば本当に地味な戦いだった。これが戦争というものならば、実に地味でくだらないものだと思う。私のが遊び終わると、すずかを除いた他のみんなが再び順々に遊び始めた。私はすずかのところに戻って感じたことを素直に話した。その時すずかが何を言ったのかは覚えていないけど、あまりいい反応はしてくれなかった。その後は、すずかと話しながら、目に見えない人間と殺し合いをする友達を眺めていた。やっぱり私はあのゲームをすべきじゃなかったんだと思う。今でも、あの体の痛みを覚えている。

拓の家から帰るとき、すっかりあのゲームを楽しんだ圭、翔、誠や恵美は、「自分も買おうかな。」などという会話をしていたと思う。すずかはその姿を見ると静かに私を見て、「理解出来ないです。何が楽しいんでしょうか。」と言った。その目からは怒りのような感情が見……。」「

その時、部屋のドアをゆっくりと開き、琴美の母親が部屋に入ってきた。琴美はすぐにパソコン画面から目を離して母親を見る。母親の顔は少し怒っているように見えた。琴美の母親は腕を腰に当てて、琴美を見た。

「琴美。明日が休みだからって、遅くまで起きているんじゃないの。」

母親はそう言い切ると、ドアへ向かって歩き出した。

「はい。わかりました。」

琴美には反省の色が無い。ただ、口だけで答えたただけ。それよりも今書いている文章のほうがよくばど琴美にとって気になることだった。

母親は琴美の部屋を出て、顔一つ分までドアを閉めた。その隙

間から琴美を見る。

「早く寝なさいよね。」

母親は言い終わるとすぐにドアを閉める。琴美には母親の足音が少しずつ遠ざかっていくことが感じられた。

琴美はドアを開けて母親が十分遠ざかったことを確認する。居ないことを確認するとドアを閉めて机に座り、再びキーボードを叩き始めた。

最終話 自己完結

最終話 自己完結

「……えた。その日は、それで終わりだった。その後にお盆があつて、しばらく六人とは会わなかった。再び彼らに会つたのは、八月の下旬。再び夏期講習が再開された日だった。

教室ですぐにずかどと会つて話をした。彼女には特に変化は見られなかった。笑顔で「後半も頑張りましょうね。」という言葉かけられた。

けど、変わらなかったのは彼女だけだった。私はあの日から血を見るたびに首の無い兵士の姿を思い出して叫びそうになった。しかし、そんな私の状態を知らない家族には心配をかけたくない。私は、体の内側から飛び出してくる気持ちをとくか押さえ込んだ。そして、早く忘れるようにした。別の事、特に勉強をして考えないようにした。しばらく思い出さなければ、記憶の奥底に追いやられて簡単には思い出さなくなるだろうと考えたから。結果として、今では思い出すことも少なくなってきた。私はこんな状態なので、悪くは無いだろう。

しかし、問題はここから。他の五人を見た時はまるで別人のように感じられた。いや、たしかに本人なのだが何か違う。

拓は、前以上に恵美と激突するようになった。他のクラスメイトには「また、何時もの事」と取られていたが、私には前とは少し違って見えた。それに、顔色が悪くて目が死んでいるように見えた。まるで生きていないのではないかと思えるほどだった。具合が悪いのかと聞いても、「寝不足なだけだ。気にするな。」と言うだけだった。

圭も何か少し違って見えた。翔の弄り方が少し過激になっていたからだ。それに対して、翔は静かに「止めてくれないかな。」と

言って圭を睨んだ。翔に関しては、言い方はどうにせよ圭に言い返しているので良いのかもしれない。

誠はあまり変わらない。しかし、前よりも冷めた口調になったような気がする。圭と翔の姿を見てため息をつくときもあった。たまに舌打ちをしているところを見たこともある。

恵美は圭と言い争うも、たまたま聞いた内容が危ないものだった。正直私の口からは言えない。それでも、二人は仲が良さそうだった。そういえば、拓の悪口を圭に話していたこともあった。

私がそれぞれに話を持ちかけると、一応の反応はしてくれる。だけど、なんか違う。

だけど、他のクラスメイトに五人のことを聞いても、「変わったかな。同じだと思うけど。」と言われるだけだった。その時は私に気がしすぎているだけで、何も変わっていないのだろうという結論を出す事でそれ以上考えないようにした。

あんなゲームをやったために、私のように何か変化が現れたのだと私は思っていた。しかし、特に変化は現れていないようだった。そして、私は日が経つにつれてそれが日常だと理解できるようになった。

だけど、やっぱり違った。夏期講習の後半が終わり、二学期になつてすぐにあの事件が起こったからだ。彼……。」

琴美は、その時はつとした。そして、これまで書いた文章を読み返す。そして、琴美は自分が求めた答えを自分なりに導き出した。

琴美は「彼」という言葉を消して彼の名前を書き、書きを書き始めた。

「……が起こした事件。これは男女のもつれを中心としたものなんじゃないかと思う。だけど、五人が居たからこそ起こったもので、

全員が居なかったら起こらなかったんじゃないだろうか。結局、偶然だったのかもしれない。」

琴美はキーボードを叩く事をやめて、椅子から立ち上がった。

窓に近づいて、カーテンを開ける。窓から見える家はみんな暗くて、時計は見えていないが夜遅いことはわかった。両腕を伸ばしながら息を吐いた。

「一気に書き過ぎたかな。けど、一つの結論が出たからこれでいいかな。」

彼女はカーテンを閉めると椅子に座り、残りの文を書いた。

「しかし、これは私が勝手に考えたものだから、真実とはまた違うのかもしれない。」

琴美はこれまで書いた文章を保存すると、ノートパソコンの電源を落とした。彼女は椅子から立ち上がると、のろのろとベッドへ近づいた。そして、そのままベッドに倒れこむ。

琴美は目を瞑り大きく息を吸い込むと、ゆっくりと吐いた。彼女にはキーボードを叩いていただけなのに、どこかを走ってきたような疲労感があった。

「今度彼のところに行ったら、私が考えた答えを言ってみよ。けど……。」

琴美はゆっくりと目を開いた。

本当は、誰が悪いんだろう。

私たちの戦争 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031f/>

私たちの戦争

2011年10月5日00時29分発行